



これから一人ひとりが、
ホストとして結び目を作り、
網の目につながっていく。

結ぶ網の目のような仕組みになると、市民意識も変わる可能性があります。

市役所では昨年、検討会を設けました。政策づくりには全職員が参加したり、庁内LAN（市役所内のパソコンネットワーク）で情報面では、市役所自体が有機体になることも可能です。

将来的には、市民も巻き込んで、留萌市全体のネットワークシステムができればと思っています。

越前 個々人ではいろんなことを考えていても、参加する場や発言の場がなかなかありません。男性と比べると女性は特にそうです。

わたしが、こういう活動をしているのも、社会とつながっていることができるからという側面もあります。インターネットでどんな意見を話せる時代に期待したいですね。

市長 多くの市民にパソコンが普及するには、まだ時間がかかるでしょうから、当面はインターネットに接続できるパ

ソコンを公共施設に設置して、市民が自由に使えるようにしたいですね。

自分の考えを発表し、賛成、反対の意見がでて、また考えと人間も考え方も成長し、議論自体も前進します。その意味でも、インターネットはおもしろい。

松本 JICでは電子メールで資料を配布し、書類なしで、パソコンを使って会議をしています。

越前 留萌市のホームページは、外に向けた情報ですが、市民向けの情報も載せて欲しいです。ごみの料金表なども、ホームページに載っていれば、知りたいときに見ることが出来ます。

転勤族の方のホームページでも面白いのがありますが、ご存知ですか。佐藤 視点が新鮮ですね。「大きな広場があるのに雪合戦やらないの?」とか「広い河川敷があるのにどうして使わないの?」とか。その人は、とうとう僕を訪ねてきて、ネット上のつながりが、生のつながりになってしまいました。

留萌には港と海がある!

市長 留萌市では、今、留萌港にフェリーを就航させようと、誘致運動を展開しています。

越後谷 一般の市民にはフェリーや港と言ってもまだピンとこないかもしれないですね。今の港では、市民が親しむ場面が思いつきません。

例えば、子供が遊べる場所があってもいいし、フェリーターミナルができれば、そこに結婚式場もできたり、コーヒーを飲みながら夕陽を見たり、道の駅との連動も有りますし、市民が交流できるよう

な機能が必要ですね。

「わたしたちは港を持ってるんだ」と、市民が誇れる港にならないと。

市長 今までは、港は思ったほど市民には身近ではなかったのかも知れません。フェリー問題は、港をどう活用するかという問題提起でもあります。港は物流の場であると同時に、市民の憩いや観光、交流の場など幅広い文化として考えてみる必要がありますね。

問題は、フェリー就航をひとつのチャンスとして、留萌経済の活性化にどう生かすかでしょう。ただ貨物の通過点に終わらせるのではなく、新しい産業への展開が必要です。

松本 3年前、JICは留萌の未来像を演劇で表現しました。明治以来の築港の歴史から、財政難の現在を経て、フェリー、人口減少、産業クラスター、自然環境など2020年の留萌の姿をシミュレーションしたんです。

「大いなる田舎」として世界遺産になる、というのがその結果でした。

市長 SLのお客様のアンケートでは、留萌のイメージは「海や魚」です。そのイメージを満足させるためにどうするのか、これからの観光やまちづくりでは本当にだいたいだと思います。

港自体が、食べて、遊べる機能を持つ「フィッシュマーズ・ワーク」みたいなのもいいでしょう。留萌の財産をどう生かしていくか、みなさんのアイデアが欲しいですね。

越前 昨年の中心市街地活性化のワークシoppでも、海や港に親しむということが話題になっていましたし、経済的なことと憩いの場としての機能を複合的に考えるべきですね。

松本 やっぱ「基本は港」でしょう。

そもそも留萌はアイヌ語の「ルルモツペ」潮の静かに入るところで、留萌の語源は「港まち」ですから。

市長 亡くなられた作曲家の佐藤勝さんも、留萌で生まれて、留萌の海を見ながら育ち音楽家としての感性を磨かれたとおっしゃっていました。留萌の風土がなかったら、音楽家になれなかったかもしれない。

佐藤 増毛出身の三国シェフも自分の舌を育てたのは増毛だと言っています。

子供たちに留萌を伝えたい。

市長 最後に、21世紀のはじまりに、抱負をお聞かせください。

越前 モットーは「何でも楽しく」。今年も明るく、元気に、前向きにですね。「るる」は、やっとロープでつながったかな? っていう感じですが、ネットワークとして機能できるように行動したいと思います。

これまで女性には、力を発揮するための土壌が少なかつただけで、もともとパ

ワーはあったと思います。男女共同参画社会の推進という時代の流れもあり、やっとそれを生かすチャンスができたんです。情報発信もしたいし、「るる」の事務所が女性センターになればいいですね。

佐藤 昨年、中心市街地活性化と都市計画マスタープランのワークシoppに参加してみたら、団体は違っても、けっこう、みんな同じように考えているんですね。

個人的には「萌州ネットワーク構想」も考えていて、女性グループのブループラネットにも入っていたいたり、僕自身も二カワになって、いろんな人やグループをくっつけて、各グループのネットワーク化に取り組みたいですね。

越後谷 フェリーの近い将来の実現に向けて頑張りたい。精鋭部隊で、船会社に向けて働きかけるとか、精力的にね。

それと21世紀は子供が少なくなりますが、実は、僕は「地域の怖いおじさん」なんです。20世紀の科学の進歩はすごかった。しかし、人間は原爆も作り、ダイオキシシンも発生させた。子供たちに

「20世紀を作った人たちが地球をこんなにした」とは言われたくない。企業活動でも、大人は子供に対して恥ずかしいことをしてないか、考えるべきです。21世紀は子供に視点を合わせていきたいですね。

松本 JICの理念は、おなかが減った人がいたら、釣りざおをあげて、使い方を教え、自分で釣って食べてもらおうというものです。でも今は「海で魚は釣れないよ」と言われる状況です。また釣れるようにするにはどうしたらいいか考える必要があります。

先日「学校では『教』はあるけど『育』がない」という話を聞きました。親が身をもって教育に取り組むことです。子供たちに分かる言葉で、子供に教える必要がある。みんなで留萌をよくするんだ、という活動をみんなでやって、行政がサポートするんだということ

を子供たちに教えたかったですね。市長 みなさんといっしょに新しい世紀のスタートを切りましょう。

全員 みんなで楽しく!



子供たちに「二十世紀を作った人たちが地球をこんなにした」とは言われたくない。